
私の中の暗殺者

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の中の暗殺者

【Nコード】

N0189H

【作者名】

カオス

【あらすじ】

九年前に事故で失明した恵子は角膜移植を受け、それから所々で記憶がなくなってしまう時間があるが、日常忙しい主婦の恵子はさほど気にしてはいなかった。しかし、角膜を提供してくれた人の人格が恵子の中で同化してしまい……

私は夢の中にいた。

（あなたは誰？）

（私はあなた自身）

（名前は？）

（名前は斎藤 恵子）

私と同じ名前だ！何でこの人が知ってるの？

（あなたは、私の何なの？）

（私は、あなた自身）

（何がしくて私の前に現れたの？）（強い口調で聞いた。

（それはもうすぐ分かるわ）

（もうすぐ分かるって？あなたはなぜ私の名前を知ってるの？）

（私はあなた自身だから……もうすぐ夜が開けるわ。また明日ね）

（待つて！何が目的なの？）（そう叫んだとき目が覚めた。

私は二人の子供がいる専業主婦だ。夫はサラリーマンで子供は七

歳の雄太と六歳の翔太そして夫の雅彦さん。私は俊彦さんと付き合い始めた頃に、事故で角膜移植を受けていた。

その日以来、少しずつ記憶が飛ぶときがあった。

私は雅彦さんの朝食を作り、仕事に送った。そして雄太と翔太の朝食を作り、雄太たちを起こす。今日は土曜日なので雄太たちの学校は休みだ。友達とどこかへ遊びに行くらしい。朝食を済ませた雄太たちは友達と遊びに行った。

「それにしてもあの夢は何だったのだろうか？」

私は普段は覚えてない夢を明確に覚えていた。なぜ私の前に来たんだろう？

考えていたら時間ばかりが過ぎていく。私は気晴らしに買い物に行くことにした。

今日安いものは、ティッシューパーが百円！ジャガイモ五十円！人参四十円安い！買いに行こう！

「でも今日の晩御飯は何にしよう？ジャガイモ、人参、カレーにしよう！雄太はカレー好きだから喜ぶだろうな。翔太は人参を食べれるようにしないと！」

今日はこれくらいか。帰ろう。

その後鶏肉を冷蔵庫に入れ、洗濯物と掃除を始めた。

主婦の仕事も楽じゃない！

洗濯が終わりかけた頃に雄太と翔太が帰ってきた。昼食の準備を手早く済ませ、ご飯を食べ、食器を洗い、残りの洗濯物を済ませることにする。

洗濯物を洗いながら、夕食の準備を始める。

まず、肉を切り、人参も細かく切っておく。ここから先は雄太も手伝わせよう！

「雄太 手伝って」

「はい。」

雄太に、炒めてもらっている最中に手早く切っていく。

俊彦さんが帰ってきた頃に、カレーが出来上がった。

翔太に分からない様に人参も小さく切ったし……

「いただきます」

雄太は大好きなカレーを口に入らないくらいにすすっている。

「いただきます」

いつもは元気なはずの翔太は、人参が入っていないことを確かめるように少しずつすすって食べている。

「どうかな？ 人参見つかったかな？」

「翔太、美味しい？」

「うんっ。美味しいよ」翔太はさっきの慎重さはどこかに行ってしまったようで、雄太よりいっぱいすすって食べていた。

「よかった。頑張ってた甲斐があるわ」

その後は、食器を片付け、寝ようとしていた時だった。

「恵子、明日は日曜日だしドライブにでも行こうか？」

「そうね。雄太と、翔太喜ぶだろうな」

（こんばんは）

（あなたは昨日の夢の……）

（覚えててくれてありがとう。でも今覚えたって意味無いでしょうけど）彼女は何か含みのある声で微かに笑っている。

（あなたは何をしに来たの？）

（私はね、あなたが憎いの。いや、あなたの全てが憎いの。だから壊すのあなたの身内は全員亡くなってたわね。）

（なぜそこまで？）

（もう調べはついてるの）

（何がしたいの？）

（もうすぐ夜が明けるわね。目が覚めても驚かないでね）彼女は、とても楽しそうに笑っている。

（何がしたいの？）（そう叫んだとき目が覚めてしまった。

「おはよう。今日の昼はどうする？」

「そうだったわね。今日、ドライブするのよね。最後の日にちよ
うどいいわ」

（最後の日って何？体も動かないし、声も出ない。どうして？）

「最後の日？何言ってるんだ？変な奴。それより、昼飯はどうする？」

「コンビニのお弁当にしましょう」

（何勝手に喋ってるのよ私！ 俊彦さんも普通に見えてるのに……）

（体動かないでしょう。今日はこの体、私のものなの）

（今日？ 何が目的よ）

（今からじゃ何も出来ないから教えてあげる。殺すの。俊彦も雄太も翔太も全員この手で…… あなたが私の幸せを全て奪ったから。今度は私の番、あなたの幸せを全て奪ってやる）

「そうだな。コンビニでいいか」

「子供達起こしてきて」

分かった。そう言うのと俊彦は寝室を出て行った。

（私はどうなってもいいから、俊彦さんや子供たちを殺すのはやめて！）私は出来る限りの声で叫んだ。

（うるさい！ 人の幸せを奪っておいてよく言うわ！）

私の体は、彼女の意思でキッチンに行っている。

「起こしたぞ」リビングのソファーに腰掛けながら言った。
「うー」

雄太はおはようをうーで済ませる。

「おはよう」

翔太も続けて起きてきた。

朝からドライブに出掛けた。

朝とお昼はコンビニで済ませ、その日の夜には帰ってきた。

「俺、ソファーで寝てるから後頼むな」

「分かったわ」そう言いながら彼女は家に荷物を運んでいた。
荷物も運び終わり、雄太と翔太は部屋に戻って行った。

（よかった）胸を撫で下ろす。

（さあ、楽しみましょうか？）心底楽しそうに言っている。

（えっ？まさか、みんなを……）

（そうよ。殺すの）

（いや〜）大声で目を閉じ、叫んでいるが、見える！俊彦さん逃げ
て。

（うるさい！）

彼女は台所にある包丁を持ち、ソファーへと向かった。

（のんきそうに寝てるわね。）

手に持った包丁を高く振り上げ、勢い良く振り下ろした。

（いや〜）目をつぶり、必死に目をそらそうとしても、見えてしま
う。

（まずは一人）

（やめて！ お願い！ 何でもするから）

（駄目よあなたの全てを壊すんだから！）

俊彦さんが寝ていたソファーは木のドアで仕切られている。

彼女は適当に材料を書いて、ドアの外に出たあと、翔太を呼んだ。

「翔太、今日のおかずの材料買い物行ってきて！」

「今日の晩御飯何？」晩御飯に夢中で彼女が背中に持っている包丁
は気付いていない。

「今日のおかずは、翔太の好きなハンバーグだよ」

「やったー。いつてきまーす」元氣良く翔太は靴をは履き始めた。

（翔太危ない！）

彼女はすでに翔太の後ろまで行っていた。

「バイバイ」そのとき、翔太の背後から刺した。
翔太の体から赤い血が染み出している。

（……翔太？）

（大丈夫。死んだわよ）

（次は雄太ね）そう私に言いながら彼女は子供部屋に足を向けている。

（……やめて！）

（着いたわ）

彼女は子供部屋のドアを包丁を持ったまま開けた。

「雄太、お母さんと一緒に死んで！」

雄太の腕を捕まえ、口を抑える。雄太は口を塞がれ、もがいていた。
包丁が雄太の首元に向けられ、そのまま刺した。

雄太はその場でうずくまり、一生懸命首を抑えていたがしばらくして動かなくなった。

「最後は私ね……」そう言いつつ、自分に包丁を向け胸を刺して死んだ。

そして私も……

私が見える。そうか、死んだのか。俊彦さんは？ 雄太は？ 翔太は？ 私は探した。

「恵子？」

「俊彦さん、ごめんなさい」

「お母さん」二人の声が聞こえてきた。

「雄太！ 翔太！ ごめんね。こんなお母さんでごめんね」

「恵子、実は知ってたんだ」

「何を？」

「恵子の中にもう一人恵子が居ること」

「何で教えてくれなかったの？ 教えてくれたら死ぬのは私一人だったのに」

「そう言うと思って言えなかったんだ」

「雄太と翔太は知ってたの？」

「うん、知ってたよ。でも、お父さんと約束したから言えなかった。男の約束」

「だから、恵子が気に病むことは無いんだよ」

私だけが知らなかった。私の中に潜む凶器を……

ごめんね。そう思うと涙が止めどなく流れる。

「お母さん、泣かないで」翔太が目には涙を貯めていた。

神様、ありがとうございます。こんなに優しい子供たちと、夫に出会わせてくれて……

（後書き）

ホラー指定しておりましたが全然怖くないです（ゴメンナサイ

余談ですが、登場人物として登場した翔太君。

本当は途轍もなく可愛く書きたかったのですが、宿題だった為枚数制限があり登場回数が少なかったのです><

この作品は4年位前に当時通っていた専門学校の姉妹校で出された宿題として提出した分です。

こんなものばかりで申し訳ない><

なので、一年位前に書いた「クリスマス」という作品を出しております。

クリスマスの作中に翔君というキャラクターを主人公にしているのですが、その翔君。

実は本作の翔太君の性格をそのまま持つて行っただけのパロディ？になっております。

もしニンジン嫌いでカレーの時必死にニンジンを探してしまう翔太君を好きな方はぜひクリスマスもご一読くださると嬉しく思います。

メッセージなど下されば大変私の栄養素となりますので、もしお時間あるようでしたら送ってくださいませ^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0189h/>

私の中の暗殺者

2010年10月28日07時10分発行